

## 展示記録

## 東北考古学の礎－東北大学奥羽史料調査部から現在へ－

鹿又 喜隆 (東北大学大学院文学研究科)

菅野 智則 (東北大学埋蔵文化財調査室)

加藤 諭 (東北大学史料館)

曾根原 理 (東北大学史料館)

会期：2022年（令和4）9月1日（木）～12月23日（金）

会場：東北大学史料館2階展示室

主催：東北大学大学院文学研究科、東北大学埋蔵文化財調査室、東北大学史料館

共催：村田町教育委員会

## (1) 企画の主旨と開催の経緯

2022年は東北大学創立115周年の記念の年であり、文学部にとっても法文学部の創立から数えて100周年の節目である。法文学部では、その草創期から奥羽史料調査部が設置され、東北地方の歴史資料が収集されてきた。それらの資料の多くは、現在文学部の考古学研究室によって管理され、片平キャンパスの文化財収蔵庫に収蔵されている。その中心が考古学資料であり、埋蔵文化財と呼ばれる資料である。近年、国内では文化財および埋蔵文化財の積極的な活用が求められており、本学でも様々な取り組みを行っている。2021年には村田町教育委員会と東北大学大学院文学研究科、埋蔵文化財調査室の三者が「文化財の研究・活用に関する相互協力協定」を締結し、共同事業を始めている。そのひとつが、村田町歴史みらい館で開催された企画展「村田縄文アカデミー」(2022年3月15日～5月15日)である。この企画展は、本学が町内で実施している姥沢遺跡(縄文時代中・後期)の成果を地域に発信すると共に、本学の総合大学115周年を記念して、所蔵される重要資料を公開することを目的にしていた。この企画展は、縄文時代に絞ったテーマではあったが、奥羽史料調査部が収集した貴重資料も多く展示された。一方で、文学部100周年を記念した企画展としては、対象の時代に偏りがある内容であったため、100年の研究の歴史をテーマとした企画が行えないかを模索していた。また、近年は文化財収蔵庫に保管されていたガラス乾板写真のデジタル化に取り組んでいる。特に本年度は、東北文化研究室(奥羽史料調査部を発展・解消して設置された組織)として文学研究科長裁量経費を得て、デジタル化の作業を進めており、その成果の公表の場を求めている。以上のような経緯で、史料館で企画展を開催する運びとなった。

前年度から企画展への打診を行っていたが、2022年7月12日開催の打合せにおいて、幾つかの変更がなされた。ひとつは開催期間であるが、当初9月から11月を予定していたが、大学の115周年事業や文学部100周年事業の行事との関わりで、期間を9月1日から12月23日までに延ばした。また、史料館は通常土日が閉館しているが、11～12月の企画展期間中は、土日も開館して頂くように調整した。それに伴い、土日勤務への協力を行う等の対応をとった。特に文化財に関心のある平日に勤務をもっている方々に、企画展へ足を運んでもらうように取り組んだつも

りである。この過程で、史料館の職員の皆様に多大なご協力を賜った。企画展の内容についても、当初は考古学のみの展示を計画し、展示ケース4つ分の小さな企画展を予定していたが、史料館からも展示品とパネル作成のご協力を頂けることとなり、内容を充実させることができた。さらに、当初の企画展のタイトルは「東北大学法文学部考古資料コレクション-東北大学考古学研究の礎-」であったが、打ち合わせを繰り返す中で、企画展のタイトルを変更した。その意図は、考古学研究の過去だけでなく現在の状況も示したいという方針によるものであった。そこで、2021年度から2022年度にかけて大学院生であった学生に依頼し、各自の研究についてそれぞれ1枚のパネルを作成してもらった。こうして、当初予定よりも期間は長く、内容の充実した企画展を開催することができた。

表1 展示品リスト (1)

番号	資料名	特徴	時期
A1	ガラス乾板(宇鉄遺跡)	青森県宇鉄遺跡出土遺物2点。乾板枠に「宇鉄」、「一一〇」の記載等有り。	1925(大正14)年4月
A2	ガラス乾板(麻生遺跡)	秋田県麻生遺跡出土遺物。乾板枠に「浄運寺1」、「一六〇」の記載等有り。	1925(大正14)～1930(昭和5)年
A3	ガラス乾板 蓋	イギリス・イルフォード社(1879(明治12)年創業)のガラス乾板。	-
A4	「奥州留守氏考」原稿	『仙台郷土研究』13-4(1938)で公表された同名の論文とは異内容となる。	1941(昭和16)年3月
A5	大島正隆書簡(森嘉兵衛あて)	森に奥羽史料調査部備付の新渡戸文書を貸与できること、大島が借用中の大槌代官記録を近く返却することなど。	1941(昭和16)年12月15日

番号	遺跡名等	所在地	種類	年代
B1	久栗坂(山野峠)遺跡	青森県青森市	縄文土器(甕)	縄文後期
B2	亀ヶ岡遺跡	青森県つがる市	縄文土器(漆塗浅鉢)	縄文晩期
B3	大木囲貝塚	宮城県七ヶ浜町	縄文土器(台付鉢)	縄文前期
B4	宇鉄遺跡	青森県外ヶ浜町	石冠	縄文晩期
B5	宇鉄遺跡	青森県外ヶ浜町	縄文土器(壺)	縄文晩期
B6	宇鉄遺跡	青森県外ヶ浜町	縄文土器(壺)	縄文晩期
B7	宇鉄遺跡	青森県外ヶ浜町	石刀	縄文晩期
B8	宇鉄遺跡	青森県外ヶ浜町	耳栓	縄文晩期
B9	宇鉄遺跡	青森県外ヶ浜町	玉類	縄文晩期
B10	宇鉄遺跡	青森県外ヶ浜町	ボタン状石製品	縄文晩期
B11	沼津貝塚	宮城県石巻市	貝輪	縄文後期・晩期
B12	沼津貝塚	宮城県石巻市	縄文土器(深鉢)	縄文晩期
B13	南小泉遺跡	宮城県仙台市	弥生土器(甕)	弥生中期
B14	南小泉遺跡	宮城県仙台市	石包丁	弥生中期
B15	垂柳遺跡	青森県田舎館村	炭化米	弥生中期
C1	斎藤忠の名刺			
C2	室浜貝塚	宮城県東松島市	縄文土器(深鉢)	縄文前期初頭
C3	大木囲貝塚	宮城県七ヶ浜町	縄文土器(深鉢)	縄文中期後葉
C4	大木囲貝塚	宮城県七ヶ浜町	縄文土器(深鉢)	縄文中期末葉
C5	不明	青森県古懸	両頭石棒	縄文晩期
C6	不明	-	両頭石棒	縄文晩期
C7	算用師遺跡	青森県三厩村	青龍刀形石製品	縄文中期・後期
C8	旧岩木町内	青森県弘前市	尖頭器	縄文前期
C9	旧中平内村	青森県平内町	尖頭器	縄文前期
C10	算用師遺跡	青森県三厩村	独鈷石	縄文晩期
D1	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点	宮城県仙台市	磁器(小中皿)肥前産(古伊万里)	18世紀前半
D2	仙台城跡二の丸地区第9地点	宮城県仙台市	人形(猫)	江戸時代
D3	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点	宮城県仙台市	開元通寶	唐(621年初鑄)

表2 展示品リスト(2)

番号	遺跡名等	所在地	種類	年代
D4	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点	宮城県仙台市	永楽通寶	明(1408年初鑄)
D5	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第14地点	宮城県仙台市	仙臺通寶	天明4(1784)年以降 5年間鑄錢
D6	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点	宮城県仙台市	寛永通寶(新寛永)	江戸時代
D7	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点	宮城県仙台市	地鎮土器:土師質土器(皿)	江戸時代
D8	福井洞穴	長崎県佐世保市	石鏃	縄文早期
D9	福井洞穴	長崎県佐世保市	縄文土器(押型文・1層)	縄文早期
D10	福井洞穴	長崎県佐世保市	縄文土器(爪形文・2層)	縄文草創期
D11	福井洞穴	長崎県佐世保市	縄文土器(隆線文・3層)	縄文草創期
D12	福井洞穴	長崎県佐世保市	細石刃(2・3層)	縄文草創期
D13	福井洞穴	長崎県佐世保市	細石刃核(2・3層)	縄文草創期
D14	福井洞穴	長崎県佐世保市	有孔円盤(2・3層)	縄文草創期
D15	福井洞穴	長崎県佐世保市	石器(9層)	旧石器時代
D16	福井洞穴	長崎県佐世保市	石器(15層)	旧石器時代
D17	蛇王洞洞穴	岩手県住田町	縄文土器(深鉢)	縄文早期
E1	姥沢遺跡	宮城県村田町	縄文土器(深鉢)	縄文中期末葉
E2	姥沢遺跡	宮城県村田町	縄文土器(深鉢)	縄文中期末葉
E3	姥沢遺跡	宮城県村田町	縄文土器(深鉢)	縄文中期末葉
E4	姥沢遺跡	宮城県村田町	縄文土器(深鉢)	縄文後期前葉
E5	姥沢遺跡	宮城県村田町	縄文土器(深鉢)	縄文後期初頭
E6	姥沢遺跡	宮城県村田町	縄文土器(深鉢)	縄文後期前葉
E7	姥沢遺跡	宮城県村田町	縄文土器(鉢)	縄文後期初頭
E8	姥沢遺跡	宮城県村田町	縄文土器(蓋)	縄文後期初頭
E9	姥沢遺跡	宮城県村田町	石鏃	縄文後期前半
E10	姥沢遺跡	宮城県村田町	石匙	縄文後期前半
E11	姥沢遺跡	宮城県村田町	磨製石斧	縄文後期前半
E12	姥沢遺跡	宮城県村田町	石棒	縄文後期前半
E13	姥沢遺跡	宮城県村田町	黒曜石	縄文後期前半
E14	姥沢遺跡	宮城県村田町	土偶	縄文後期前葉
F1	中沢目貝塚	宮城県大崎市	土面	縄文晩期
F2	不明(伝雨滝遺跡)	岩手県二戸市	土面	縄文晩期
F3	沼津貝塚	宮城県石巻市	土偶	縄文晩期
F4	沼津貝塚	宮城県石巻市	土偶	縄文晩期
F5	沼津貝塚	宮城県石巻市	土偶	縄文晩期
F6	富田遺跡	宮城県仙台市	土偶	縄文中期
F7	三神峯遺跡	宮城県仙台市	土偶	縄文前期
F8	亀ヶ岡遺跡	青森県つがる市	土偶	縄文晩期
F9	亀ヶ岡遺跡	青森県つがる市	土偶	縄文晩期
F10	亀ヶ岡遺跡	青森県つがる市	土偶	縄文晩期
F11	中神遺跡	岩手県一関市	巻貝形土製品	縄文後期
F12	北浦遺跡	秋田県男鹿市	玉斧	縄文前期
F13	十腰内遺跡	青森県弘前市	ヒスイ製玉	縄文晩期
F15	不明	青森県	ヒスイ製玉	縄文晩期
F16	笹森町	青森県笹森町	ヒスイ製玉	縄文晩期
F17	藤株遺跡	秋田県北秋田市	岩版	縄文晩期
F18	不明	青森県	岩版	縄文晩期
F19	壇の上遺跡	秋田県(羽後)	岩版	縄文晩期
F19	牡丹平遺跡	青森県	ヒスイ製玉	縄文晩期
F20	麻生遺跡	秋田県能代市	岩版	縄文晩期
F21	柏浜遺跡	サハリン	土器	7-10世紀
F22	蘭泊遺跡	サハリン	土器	5-10世紀
F23	江ノ浦貝塚	サハリン	骨角器	7-10世紀
F24	鈴谷貝塚	サハリン	石器	5-10世紀

所蔵機関

\*A4・A5:史料館、D1～D7、E9～E14:埋蔵文化財調査室、E1～E8:村田町教育委員会、それら以外は文学研究科

## (2) 展示の構成や関連行事など

企画展は7つのセクションから成り、21枚のパネルと85件の展示資料によって構成されている(表1、2)。法文学部の草創期の歴史・考古学の研究の解説から始まり、最新の研究成果までを紹介する流れとなっている。展示スペースが狭く、網羅的な紹介は難しかったため、特に研究初期の活動と資料の展示を中心に据えた。また、スペースの関係で、時系列での展示はできず、同じ展示ケースに異なる主題の資料が並ぶ状況も生じたが、結果的には考古学の歴史的・社会的多面性を示すことに繋がったと考えている。

その他の行事等を時系列に並べると、7月27日(水)に本学からプレスリリースを発信した。9月3日(土)に、東北大学基金「感謝のつどい」にて、展示説明会を実施した。9月7日(水)には河北新報の取材を受け、10月11日(火)に河北新報オンライン等に記事が掲載された。また、10月15日(土)の百周年記念事業後の史料館ガイドにて展示説明会を実施した。

## (3) 展示資料・展示解説一覧

### セクションA

#### パネル1 今回の展示にあたって

東北大学の考古学研究は、1917(大正6)年の松本彦七郎による岩手県獺沢貝塚、宮城県大木岡貝塚の発掘にはじまる。1925(大正14)年に、喜田貞吉は「東北帝国大学の独自性を東北地方の歴史研究によって発揮すべし」という信条のもとに、中村善太郎(西洋史)と古田良一(日本近世史)と共に、奥羽史料調査部を設立した。当時、資料の散逸を防ぎ、歴史資料を確保することが第一の課題となっていた。本展示では、その奥羽史料調査部に関連する様々な資料を展示し、東北大学における考古学研究の歴史のはじまりを示す。そして、その伝統を受け継いだ文学研究科考古学研究室や、埋蔵文化財調査室の研究や活動を通じ、東北大学の100年以上にわたる考古学研究の蓄積と近年の科学的な研究の発展についてもご紹介する。

#### パネル2 東北大学 奥羽史料調査部

1922(大正11)年に法文学部が設置され、東北帝国大学における日本史研究がスタートした際のスタッフは、近世史を専門とする古田良一と、考古学・古代史を担当する喜田貞吉であった。東大や京大とは異なる特色を求め、彼らを中心に1925(大正14)年に設置されたのが「奥羽史料調査部」である。その活動は、東北各地の考古学資料や文献資料の調査と収集が中心で、現在の東北大学が所蔵している古文書の中核部分は、戦前の収集成果である。中でも最大のコレクションが、秋田子爵家(旧三春藩主)旧蔵の「秋田家史料」である(図1)。古文書に加え、写本や書跡、蝦夷が使用したと伝えられる弓など、多彩な内容を誇る。奥羽史料調査部は、1955(昭和30)年に文学部東北文化研究室となり、現在に至っている。





秋田家史料のうち、戦国時代の秋田の大名であった安東愛季(あんどう ちかすえ 1539-1587)の肖像画



東北文化研究室が発行している『東北文化資料叢書』。現在まで12集が刊行されています。

図1 秋田家史料の肖像画と東北文化資料叢書(パネル2より)

### パネル3 東北大学の考古学年表

1907年の東北帝国大学の創立から、松本彦七郎(理学部)、長谷部言人・山内清男(医学部)、喜田貞吉、伊東信雄、芹沢長介らの主な発掘調査について年表に示した(図2)。

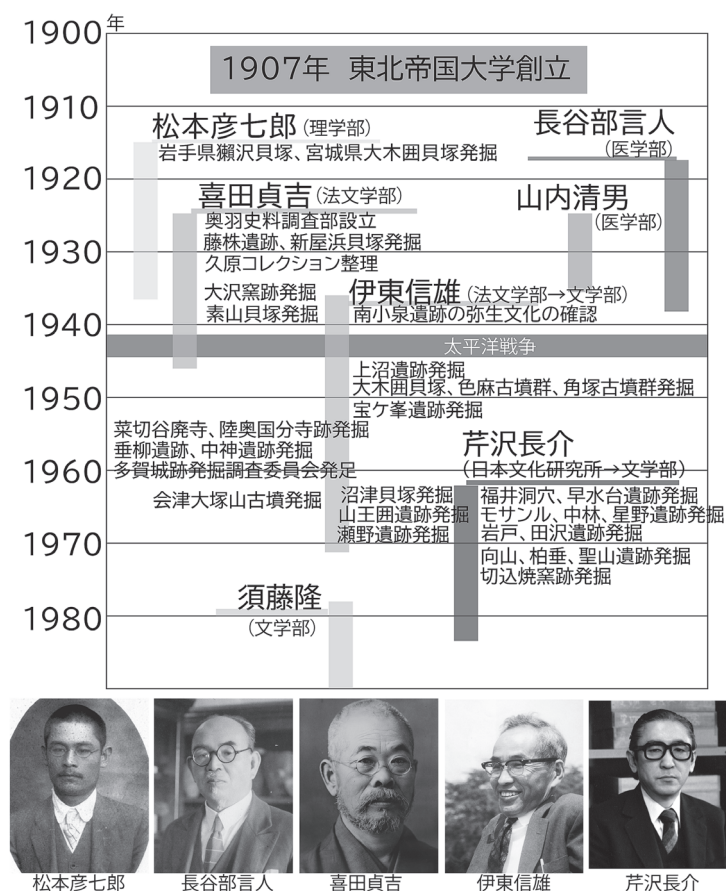


図2 東北大学考古学年表(パネル3より)

#### パネル4 ガラス乾板写真にみる調査活動

片平キャンパスの文化財収蔵庫には、奥羽史料調査部の活動に伴う写真が残されている。考古学研究室では、2014（平成26）年からガラス乾板写真のデジタル化を進めており、奥羽史料調査部の活動の一端を垣間見ることができる（図3）。写真には、現存しない資料や、1920～1930年代の調査風景、民俗資料、文書資料などが含まれる。未公表の記録も多いため、様々な分野の学史的 연구に寄与できる可能性を秘めている。



法文学部初期の集合写真

片平キャンパス内の一室で撮影された写真。中央に和装の喜田貞吉（考古学、日本古代史）、その左が古田良一（日本近世史）、右が中村善太郎（西洋史）が揃い、奥羽史料調査部の創設メンバーが集う貴重な写真です。右側には2名の女学生がおり、本学の「門戸開放」の姿を見ることができます。



青森県宇鉄遺跡出土品  
(法文学部第1号資料)



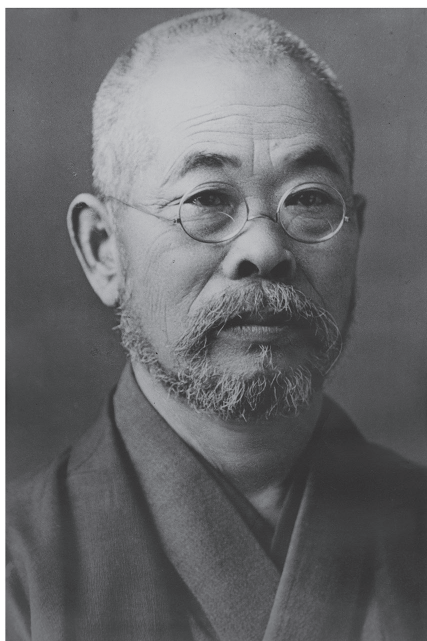
秋田県麻生遺跡出土品

図3 デジタル化されたガラス乾板写真（パネル4より）

## セクションB

#### パネル5 東北大学の考古学のはじまり

東北大学の考古学研究は、約100年の歴史がある。なかでも仙台湾での縄文貝塚の発掘や、旧石器時代から縄文時代への変遷をめぐる研究が良く知られる。東北大学文学部としては、喜田貞吉が講師となり、奥羽史料調査部が設立されたことが考古学研究の始まりである。最初に入手された資料は青森県宇鉄遺跡の資料であった。その後、青森県久栗坂（山野峠）遺跡（図4）や、秋田県麻生遺跡の出土品も収集され、東北地方における縄文時代研究の基礎資料となった。



喜田貞吉(1871～1939)

徳島県生まれ。1924(大正13)年に京都帝国大学を辞し、東北帝国大学の日本古代史と考古学の講師として赴任した。法隆寺再建論争やミネルヴァ論争など学会の多くの議論を巻き起こした。



久栗坂(山野峠)遺跡の土器棺(1933)

青森市に所在し、道路の拡幅工事で偶然発見された。石室内には1～3個の土器棺が入っており、合計6個が見つかった。うち5個に人骨が納められていた。そのうちの最も保存状態が良い土器棺と人骨を喜田が東北帝大に持ち帰った。この土器は人骨を納めるために特別に製作されたものであり、頸部に橋状把手けいぶ きょうじょうとつてがつき、赤色顔料が塗られている。

図4 喜田貞吉と久栗坂(山野峠)遺跡の土器棺の出土状況(パネル5より)

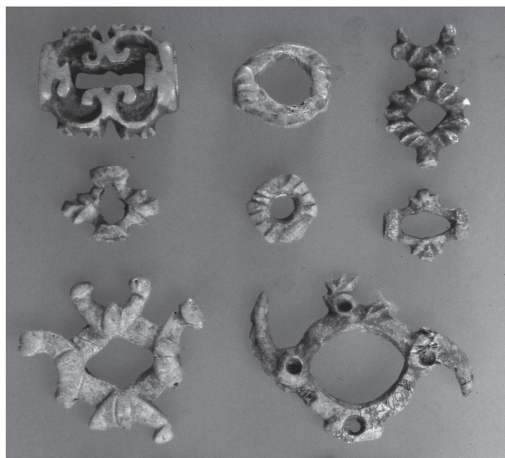
## パネル6 東北大学の縄文コレクション

宮城県沼津貝塚は1909～1932(明治42～昭和7)年に毛利総七郎と遠藤源七によって発掘された。その膨大な資料は毛利邸内の石巻考古館で一般公開されたこともあり、国内で最も有名な縄文貝塚の一つに数えられる。学術資料に対する両氏の深慮から東北大学に一括で提供された。1963(昭和38)年には骨角器など473点が重要文化財に指定された(図5)。沼津貝塚は1963年に東北大学、1967(昭和42)年に宮城県教育委員会によって発掘され、1972(昭和47)年に国史跡に指定された。

## パネル7 東北大学における先史研究

喜田貞吉は東北帝大に赴任した翌年(1925年:大正14年)に福島県竈原(袋原)遺跡を視察した。出土品の一部は奥羽史料調査部に提供され、現在も収蔵されている。また、多くのコレクションは助手の山本榊蔵によって整理され、その後、伊東信雄が嘱託となり引き継がれる。伊東は喜田や山内清男の発掘に参加して考古学を学び、特に東北地方の先史・古代遺跡の研究を精力的に行った。伊東は1957(昭和32)年に文学部考古学講座の初代教授となった。伊東の指揮のもと、数多くの縄文遺跡が調査された。さらに弥生遺跡の調査によって、東北の稲作文化の始まりを追求した(図6)。





沼津貝塚の骨角器(重要文化財)

沼津貝塚の出土品は膨大であり、重要文化財以外にも多くの完形土器や各種の石器、土偶がある。なかでも骨角器には優品が多く、重要文化財のほとんどを占める。



旧赤レンガ書庫(文化財収蔵庫)

旧制第二高等学校の書庫として1910(明治43)年頃に建設され、1925(大正14)年の同校の移転により東北帝大に移管された。同年設置の法文学部奥羽史料調査部の中核的施設として長く利用される。調査部の活動はこの3階でも行われ、学部垣根を越えた交流があり、在野の研究者が出入りする学びの場であった。現在は文化財収蔵庫となり、重要文化財2件(477点)をはじめ、貴重な考古資料と民俗資料、約20万点を収蔵する。

図5 沼津貝塚と文化財収蔵庫 (パネル6より)



青森県垂柳遺跡の発掘調査(1982)

宮城県内では大木岡、素山、沼津、梨木畑、館、長根などの貝塚のほか、山王岡遺跡のような低湿地遺跡を調査し、縄文文化を鮮明に描くことに成功しました。



宮城県南小泉遺跡の合口甕棺(1939)



垂柳遺跡での炭化米の回収(1958)

図6 伊東信雄による弥生時代遺跡の調査 (パネル7より)



## セクションC

### パネル8 祈りと祭り

石棒は、男性的な祈りと祭りの道具である。男性の生殖器を硬い岩石で作るのは、生命力と繁栄を祈る行為だと考えられる。縄文時代中期の遺跡で見つかる石棒は、焼けており、割られた状態であることも多い。時には加工のない棒状の石も立てられて、祭られることがある。縄文時代晩期になると、石棒は装飾性が高まり、小型化しており、石棒での祭りの仕方が変わったことを示している。このような石棒祭祀は現代にもあり、道祖神信仰と結びついて、中部地方から関東・東北地方にみられる（図7）。縄文時代から基層文化として繋がるものなのかもしれない。



いしがみ いしがみだい 石上の道祖神(福島県金山町) かねやままち

道祖神の近くには、石神平遺跡があります。並べられている石棒の一部は遺跡から持って来たものかもしれません。

図7 現代の道祖神信仰と石棒（パネル8より）

### パネル9 奥羽史料調査部周辺の研究者 ー斎藤 忠・山内 清男ー

斎藤 忠（さいとう ただし 1908～2013）

1926（大正15）年に宮城県立第二中学校を卒業、第二高等学校文化甲類に入学し、1929（昭和4）年に東京帝国大学に進学した。1965（昭和40）年から東京大学教授、1970（昭和45）年から大正大学教授を歴任する。中・高時代には、宮城県内の貝塚等を踏査した。二高時代には、巡蹟会（顧問：阿刀田令造）を立ち上げ、喜田貞吉に講演を依頼している。また、山内清男の宮城県七ヶ浜町大木岡貝塚の調査に参加した。

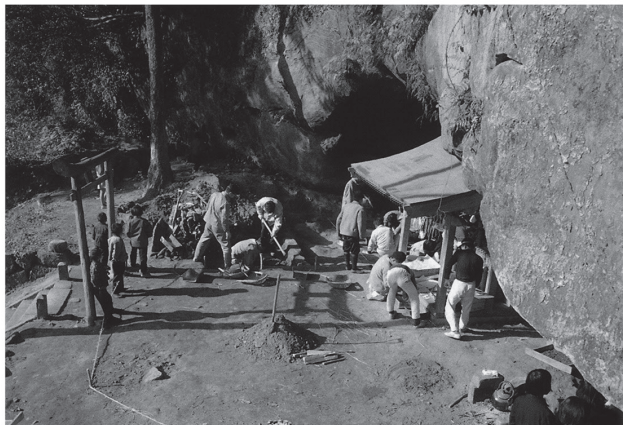
山内 清男（やまのうち すがお 1902～1970）

1919（大正8）年に東京帝国大学理学部人類学科専科に進学した後、1924（大正13）年に東北帝国大学医学部解剖学教室に副手として着任した。この時期に東北各地の縄文時代の貝塚を調査している。1946（昭和21）年に東京帝国大学理学部人類学教室非常勤講師等を経て、1962（昭和37）年に成城大学文芸学部教授に着任する。同年に着任した喜田貞吉と山内は、集会や論文等で激しく議論をしているが、非常に親しい間柄であったようである（角田1996）。

## セクションD

### パネル10 東北大学における旧石器研究

1957年に文学部考古学講座が開設され、伊東信雄が初代の教授となった。芹沢長介は1963年に日本文化研究所の助教授となり、特に旧石器時代と縄文時代の研究を進めた。1960-1964年の長崎県福井洞穴の調査では、約12,000年前の世界最古の土器が検出した（図8）。この成果は国際的に広く知られるに至る。その後、芹沢は日本列島における最古の文化を探求していく。北関東では、1965年から栃木県星野遺跡を、1970・71年には同県向山遺跡を発掘し、火山灰との上下関係から、後期旧石器時代初頭から前期旧石器時代の文化変化を追求した。



長崎県福井洞穴の発掘調査(1964)

最古の土器の年代は放射性炭素年代<sup>ほうしゃせいたんそねんだい</sup>で12,000年と測定されました。旧石器時代を特徴づける細石刃<sup>さいせきじん</sup>を伴い、旧石器時代から縄文時代への移行を示します。また、旧石器文化層が重複し、編年の基準となりました。



栃木県星野遺跡の発掘調査(1967)

図8 芹沢長介による旧石器時代遺跡の調査（パネル10より）



## パネル11 東北大学埋蔵文化財調査室

埋蔵文化財調査室は、東北大学構内の施設整備を円滑に行うため、文化財保護法等の各種法令に基づき、構内の埋蔵文化財（遺跡）に関する調査を行い、併せて資料の保管及びその活用を行う組織である。1983（昭和58）年度に東北大学埋蔵文化財調査委員会が設置され、その実務機関である埋蔵文化財調査室が発掘調査等を実施してきた（図9）。これ以降、数度の改組を経て、現在に至る。当初、調査員は文学部助手として、考古学研究室の出身者がその任にあたってきた。現在は片平キャンパスに所在し、発掘調査のほか、出土遺物の整理作業と報告書の刊行、展示等を中心に活動している。



左の写真は2015（平成27）年度に調査を実施した地下鉄東西線川内駅前（川内キャンパス）に伴う発掘調査の風景です。

発掘調査によって、様々な遺物や、建物跡等を確認できますが、遺跡自体は破壊されて無くなってしまいます。遺跡を後世に残すため、開発の前に発掘調査等を必要としないように調整を行っています。

図9 埋蔵文化財調査室による川内キャンパスの発掘調査（パネル11より）

## セクションE

### パネル12 地域と考古学

縄文時代に暮らしていた人々は、その居住地周囲の固有の環境を背景とした生活をおくっていた。その環境には、地形や動植物の生態系等を含む自然環境と、当時の人々の文化・伝統等による社会（あるいは文化）環境がある。そして、過去の様々な構造物（遺構）や道具（遺物）の様相は、そのような固有の環境に強く影響を受けている。そのため、ある遺跡を研究する際には、個々の遺構や遺物だけではなく、その遺跡が存在する「地域」に関する様々な事柄を検討する必要がある。例えば、石器研究では、石器に使用する原石をどこから採取していたのか？という、地域の石材環境に関する研究も必要である。また、土器研究では、地域ごとの文様や作り方の違い等から、当時の他の地域との文化的な関係性を想定することもできる。このような地域研究により、その地域の固有環境に応じた歴史的特徴を明らかにすることができる。この特徴は、過去の在り方から現在を考える上で、非常に重要な知見となりうる。

### パネル13 地域に根ざした文化財の利活用を目指して

#### ー文化財の研究・活用に関する相互協力協定 締結についてー

宮城県村田町には、学術上重要な遺跡等の多種多様な文化財が存在する。これらの文化財を対象として、東北大学大学院文学研究科・埋蔵文化財調査室は、村田町教育委員会と相互協力し、実践的な研究・活用事業を実施する協定を結ぶこととした。本協定は、「三者の人的・知的資源及び研究成果等の交流を促進し、文化財の研究・活用分野において協力し、地域における文化事業の振興と人材育成に寄与することを目的」としている。また、連携事項は、(1) 文化財の利活用を通じた文化事業の振興に関すること、(2) 文化財の学術研究に関すること、(3) 文化財を通じた教育・人材育成に関することの3点である。これまで、村田町に所在する縄文時代の姥沢遺跡の調査を進めている。本協定は、このような遺跡調査だけではなく、村田町に所在するほかの文化財に関する研究と利活用の枠組みとして設定しており、地方自治体における文化財の利活用に関するモデルケース事業としたいと考えている。

### パネル14 姥沢遺跡の歴史

姥沢遺跡は、1954（昭和29）年刊行の『沼邊村史』に「姥澤土器片及石器」について紹介されている。続く1977（昭和52）年の『村田町史』には、鶏権現遺跡として紹介されるが、姥沢・弁天・横山の各地区を含む大きな遺跡として認識されていたようである。なお、1957（昭和32）年『宮城県史』の遺跡リストの中にも、「沼田姥沢」の記載があり、広く知られた遺跡であったことがわかる。『村田町史』では縄文時代中期の遺跡であることと、姥沢は村上金栄氏宅前の丘であることが記載され、採集された土器の写真が掲載されている（図10）。



図10 『村田町史』掲載の縄文遺跡分布図と姥沢遺跡の縄文土器（パネル14より）



### パネル15 姥沢遺跡の発掘調査

姥沢遺跡の発掘調査は、縄文時代中期から後期にかけての縄文人の生活の実態について明らかにすることを目的とし、2019（平成31）年度から開始された。2020（令和2）年度は、図11のように、丘陵西側の緩斜面部（2区）、沢側（6区）で調査している。2区からは縄文時代中期後半、6区からは後期前半の遺物が出土した。2022年度は、6区を広げ、縄文時代後期前半の遺構や遺物の確認を目指す。



図11 姥沢遺跡の発掘調査（パネル15より）

## セクションF

### パネル16 土偶の中身

土偶は、女性的な祈りと祭りの道具である。出産は誕生や繁栄を象徴するため、豊かな山海の恵みや子孫繁栄を祈る道具だと考えられる。土偶は、割れた状態で見つかることが多いが、意図的な破壊行為であったかは賛否がある。最新の分析機器（マイクロX線CT装置）を使った分析では、土偶の内部構造を把握できた。土偶の作り方を推定でき、ときには混入物が発見されることもある（図12）。これらの混入物が、土偶の心臓や赤ちゃんを象徴するのならば、土偶を製作すること自体が祈りの行為だったと言えるのではないだろうか。

### パネル17 東北大学の国際的調査

東北大学の考古学研究室による国際的な調査は、伊東信雄によるサハリン（旧樺太庁）の調査や、芹沢長介による各国との交流の基盤の上に開始された（図13）。国際共同の発掘調査や資料調査は、アメリカ、ロシア、中国、韓国、モンゴル、エクアドルなどで2010（平成22）年以降も実施されている。また、本学の発掘調査に海外の学生が参加する等の相互連携研究が盛んに進められている。

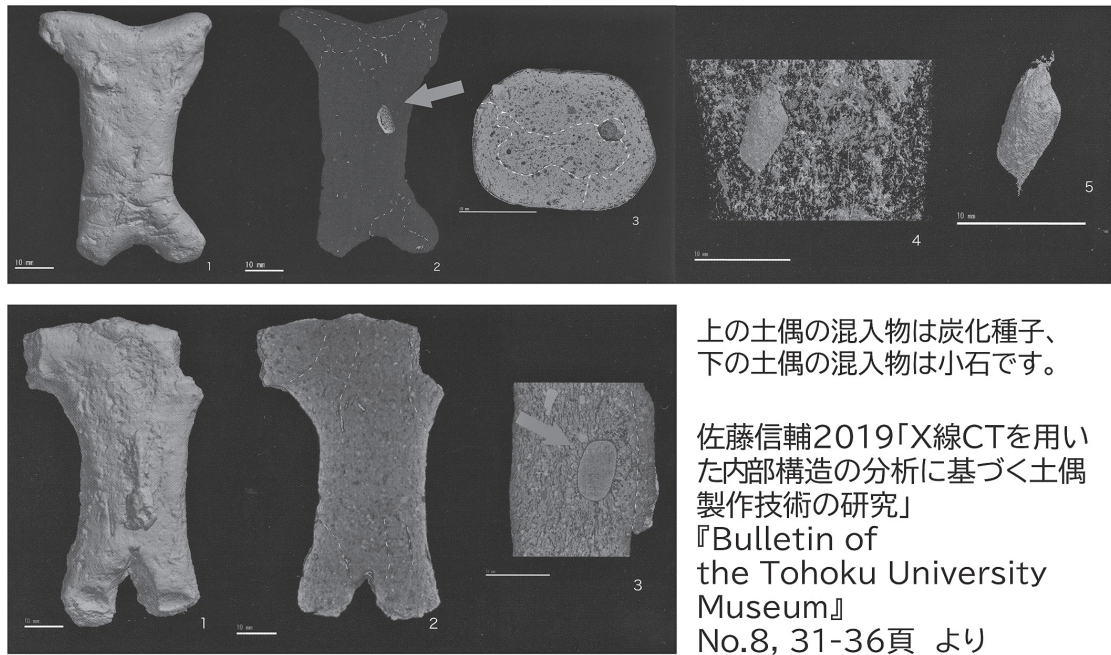


図12 マイクロX線CTによる土偶内部の観察 (パネル16より)



図13 東北大学による海外での発掘調査

## セクションG

ここでは、若手研究者による最新の調査成果を紹介した。いずれの研究成果も学会等で賞を受けているものであり、一定の評価を得ている。

パネル18 遠くまで運ばれた東北の黒曜石 (青木要祐 作)

パネル19 後期旧石器時代の狩猟具 (戸塚瞬翼 作)

パネル20 石器はどうやって作られるのか (金彦中 作)

パネル21 平安時代の人は何色が好き? (館内魁生 作)



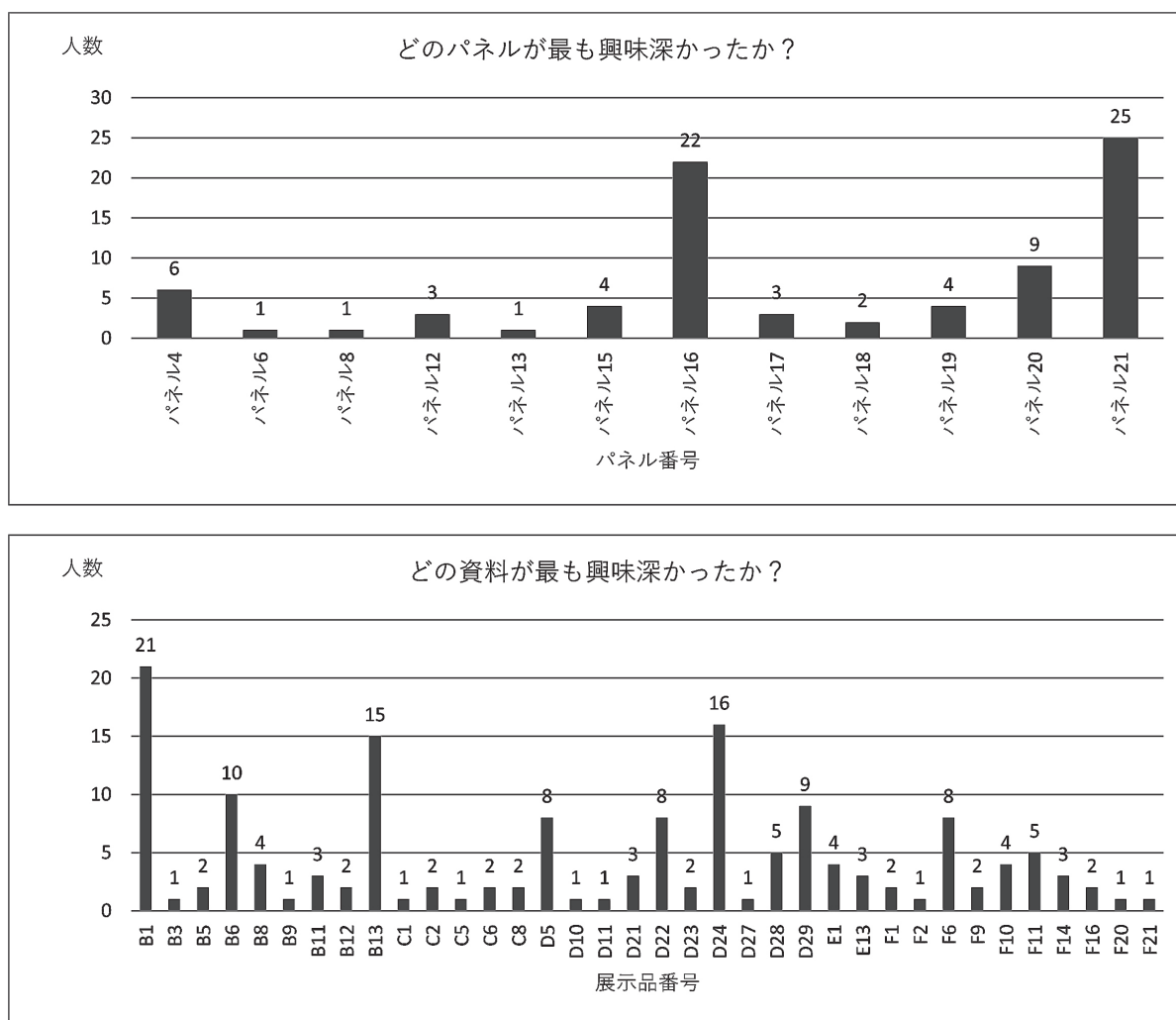


図14 企画展アンケート結果

#### (4) 感想とアンケート結果

本企画展では、2度の展示説明会を通して、直接来館者から質問を受けたり、感想を聞いたりできたが、常に展示解説を行える状況ではなかったことが反省点である。そのため企画展への感想を得るために、来館者からアンケートを頂くことにした。全部で51件のアンケートを頂いた。中には、「このような企画展を定期的実施して欲しい」、あるいは「規模を大きくして欲しい」という要望もあった。また、今回休日開館を試みたことから、「今後も休日にも開館して欲しい」という声もあった。さらに、アンケートを回収したことによって、リピーターが居ることが分かった。また、来館のきっかけは様々であり、他の博物館等にあったチラシを見てきた方、河北新報の記事を読んで来た方、大学のホームページで知って足を運んだ方、偶然片平を散歩していて見つけた方などの回答があった。このように、一般向けのアンケートには好感をもって見学した方の感想が多かったと言える。

さらに、文学部の講義で企画展を見学してもらい、感想アンケートを104名から収集することができた。その結果を図14に示した。最も興味をもってもらった資料は、久栗坂（山野峠）遺

跡の土器棺であった。その大きさや独特の形態に興味が向いたようである。また、企画展のポスターに採用されていること、喜田貞吉による当時の写真の存在も大きいようであった。そのほか、仙台城二の丸跡から出土した江戸時代の人形（猫）、垂柳遺跡から出土した弥生時代の炭化米、宇鉄遺跡の縄文時代の耳栓（じせん）に関心が集まった。投票が分かれたが、縄文時代の土偶や土面は総じて関心が高いということが分かった。結果的に見ると、一目見て何か分かるものに関心が集まる傾向にある。また、縄文時代の耳栓は、現代で言えばピアスに当たる装身具だが、現代の耳栓（みみせん）と同じ機能だと勘違いして、注目されたという側面もある。こうした誤解は、展示説明会を通して解決すれば、さらに深い興味に繋がるのだと感じている。その点は、今回の一番の反省点であり、解説員の不足・不在が問題点であるとアンケートにも多く書かれていた。

また、最も関心をもってもらったパネルは、No.18～21の近年の学生によって作成されたパネルであった。アンケートの対象が学生であるということも理由であろうが、学生（若者）にとっては過去の歴史よりも、今（あるいは、これから）に対する関心が高いと言えるのかもしれない。または、若手研究者の情熱と明快なパネルだからこそ、関心が集まったのかもしれない。パネル16にしても、近年の学生の研究に基づく最新研究の成果である。こうした傾向を見ると、学生は最新の成果や情報を求めていると言えるのではないだろうか。当初、本企画展は文学部創立100年を振り返ることを目的にしていたが、それだけでは不足だったのだと改めて感じた。企画展のタイトルに「～から現在へ」という文言を加えたことが、結果的には良かったのだと痛感した。

その他にも大勢の方からご意見を頂いたため、次回の企画展に活かし、今後の学芸員関連の講義等にも活用できるのではないかと感じられた。改めて、企画展というのは双方向的な仕組みが無ければ、成功に繋がらないのだと実感したことを述べて、企画展の記録を総括したい。

## 謝辞

今回の展示にあたり、以下の諸氏、諸機関からご協力・ご支援を頂いた。記して謝意を表したい。  
藤澤敦、佐野勝宏、工藤久美子、佐藤信輔、青木要祐、館内魁生、王晗、戸塚瞬翼、金彦中、村田町教育委員会

## 参考文献（展示に関わるものを含む）

- 伊東信雄編 1962『沼津貝塚出土石器時代遺物』1 東北大学文学部東北文化研究室  
伊東信雄編 1963『沼津貝塚出土石器時代遺物』2 東北大学文学部日本文化研究所  
伊東信雄編 1964『沼津貝塚出土石器時代遺物』3 東北大学文学部日本文化研究所  
伊東信雄 1968「宮城県牡鹿郡稲井町沼津貝塚」『日本考古学年報』16 p.82  
大島正隆 1933「奥州留守氏考」『仙台郷土研究』13-4  
加藤道男ほか 1984『東北自動車道調査報告書IX』宮城県教育委員会  
川口 亮・佐藤信輔・山口貴久・山田凜太郎 2016「東北大学所蔵の宇鉄遺跡出土土器について」『青森考古学』24 pp.43-59  
川口 亮・熊谷亮介・村椿篤史 2014「東北大学所蔵の麻生遺跡コレクション（4）」『秋田考古学』58 pp.1-21



- 喜田貞吉 1933『還暦記念 六十年之回顧』自刊
- 喜田貞吉 1934「青森県出土洗骨入土器」『歴史地理』63-6 pp.84-88
- 喜田貞吉 1982 伊東信雄編『学窓日誌』喜田貞吉著作集 13 平凡社
- 久留島典子他編 2017『文化財としてのガラス乾板』勉誠出版
- 斎藤 忠 1930a「松島湾内諸島に於ける貝塚調査概報」『東北文化研究』2-4 pp.83-100
- 斎藤 忠 1930b「松島湾内諸島に於ける貝塚調査概報（下）」『東北文化研究』2-5 pp.37-49
- 斎藤 忠 2002『考古学とともに七十五年 斎藤忠自伝』学生社
- 佐藤信輔 2019「X線CTを用いた内部構造の分析に基づく土偶製作技術の研究」『Bulletin of the Tohoku University Museum』No.8 pp.31-36
- 福島雅儀ほか 1996『三春ダム関連遺跡発掘調査報告 8』福島県文化センター
- 角田文衛 1996「山内さんのこと」『画竜点睛』pp.79-82
- 藤巻正信ほか 1991『城之腰遺跡（図版編）』新潟県教育委員会
- 藤沼邦彦 1972「石巻市沼津貝塚」『日本考古学年報』20 pp.88-89
- 村上 拓 2002『清水遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 毛利総七郎・遠藤源七 1953『陸前沼津貝塚骨角器図録』三和興行印刷所
- 柳原敏昭編 2012『大島正隆資料集』東北文化資料叢書第6集 東北大学大学院文学研究科 東北文化研究室
- 山内清男 1937「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』1-1 pp.29-32
- 山内清男先生没後25年記念論集刊行会 1996『画竜点睛』
- Iovita, R. and Sano, K.(Eds). 2016 Multidisciplinary Approaches to the Study of Stone Age Weaponry, Springer.
- Sano, K., Denda, Y. and Oba, M. 2016 Experiments in Fracture Patterns and Impact Velocity with Replica Hunting Weapons in Japan. Vertebrate Paleobiology and Paleoanthropology. Springer. pp.29-46
- Serizawa C. 1999 Paleolithic Sites in Japan Excavated by C. Serizawa. Tohoku Fukushi University

そのほか、文学研究科考古学研究室、埋蔵文化財調査室の刊行した遺跡発掘調査報告書等を多数参照している。